

「飢饉つて、食べるものが、なんにもなくなつてしまふのだね。」

「ああ、さうなんだよ。馬を殺して食つたり、犬を殺して食つたりしなくては、ならなくなる時があるのだよ。」

二人の少年の傍には、宿無犬の白が、じつとしやがんで、お爺さんの話を聞いてゐました。この聞き分けのある、おとなしい犬は、別に飼主がなかつたので、ある時はお爺さんのところで、ある時は秀吉のところ、ある時は正二の家の勝手許で、ご飯をもらつたり、魚の骨をもらつたりして、生きて来たのでありました。

「もし、飢饉になつたら、白なんか、どうなるだらうね。」と、正ちゃんは、犬の頭を抱へるやうにして、問ひました。

「正ちゃんは、殺す氣かい。」と、秀吉が言ひました。

「誰が殺すもんか。しかし、犬にやるもんがなかつたら、犬は死んでしまふぢやないか。」と、正二が言ひました。

お爺さんは、二人のいふことをきいてゐましたが、にこにここと笑つて、

「人間が、死ぬんだから、犬なんかにかまつてゐられないのだよ。」と、言ひました。

「正ちゃん、犬と人間と、どちらが大事だい。」と、秀吉が叫びました。

正二は、昂奮して、

「そんなことは分りきつてゐるぢやないか。だけど、自分の可愛がつてゐるものを、食物がないからつて、見殺しにできやしないよ。自分の食べるものを分けてやつたらいいだらう……。」と、白の頭を撫でながら言ひました。

「君は、分けてやる？」と、秀吉は、念を押した。

「もちよ。君は？」と、こんどは、正二が秀吉にききました。

「僕も分けてやる。」と、秀吉は答へました。

「私は、やらんかもしれんな。」と、お爺さんが笑ふと、二人は右と左から、お爺さんにかかつて、頸つ玉につかまつたのです。

「あ、降参、降参。」

お爺さんは、どんな飢饉が來ても、白を可愛がることを誓ひました。

それは、戯談をいつて、遊んでゐたにすぎなかつたが、東北地方の飢饉の被害は、寒くなるにつれて、だんだんひどくなることが分りました。

ある日、正ちゃんのお姉さんが、童話劇の切符を三枚もつて來て、正ちゃんにお渡しになつて、

「誰か、こんどの日曜日に、童話劇を見に行くお友だちがありませんか。こ

のお金は、東北の凶作で困つてゐる人たちのために、寄附をするのですから、さういつて、きいてごらん下さい。」と、言ひました。

東北の、飢饉に困つてゐる人たちのためといふので、正ちゃんは、學校へ行つて、なるたけ行きさうなお友だちに話したのです。すると、すぐに賛成者がありさうに思つたのが、なかなかないのでした。

「君、東北の困つてゐる人たちのために、寄附をするんだから……。」と、正ちゃんが、一生けんめいに言つても、一人は、

「僕、うちへ歸つて、きいてみてから。」と、答へるのもあれば、また、他の一人は、

「僕、活動寫真なら、行つてもいいけれど、童話劇は、きらひだからな。」と、答へるのであります。

正ちゃんは、歸つて、憤慨はんがいして、そのことを姉んに話しました。その結果、一枚は正ちゃんに、一枚は秀公に姉さんが買つてやり、あとの一枚を正二が立雄さんの家へ行つて、すすめてみることにになりました。

「立雄君。」と、正二は、門の前に立つて呼びました。すると、ぢきに立雄が出て來ました。

「君、日曜に、童話劇を見に行かないか？」と、切符を示してすすめました。そして、このお金が、飢饉地方の寄附金になることも話したのです。

「ちよつと待つてくれたまへ、お母さんにきいてみるから。」と、立雄は、家の中へ駆けこんで行きました。そして、しばらくして出て來ました。正二は、その様子を見て、

「だめかい。」と、問ひました。

「晩にお父さんがお歸りになつて、きいてみなければ分らないつて。」と、答へたのです。

「お母さんだけでは、分らんのかなあ。」と、正ちゃんは思ひながら、家へ歸りました。

翌日、學校へ行くと、立雄は正二のところへやつて來て、

「お父さんは、活動寫眞は、見ていけないが、童話劇なら行つてもいいといつたよ。」と、昨日の返事をしました。

そこで、三人は、日曜日の正午ごろ、一しよに出かけたのです。

「仲よくして、歸つておいで。」と、正ちゃんのお姉さんは、三人の後姿を見送つて言ひました。

朝から、いくらか曇つてゐたが、降らないつもりなのが、暮方くれがたから雨になりま

した。

「ちやうど、今時分歸りだが、困つてゐるだらうね。停車場まで迎へに行かうかしら。」と、姉さんが思つてゐるところへ、立雄の家から、立雄のお父さんが、自動車で迎へに行つたからと知らせが來ました。

立雄のお父さんは、自動車の中で、ぶつぶつ、小言をいつてゐられました。

「冬は、日の短いことは分つてゐる。早くはじめて、暗くならないうちに終つて、子供たちを歸すのがほんとうなのだ。いつたい、長たらしい講演をはじめに聞かせたりするから、そんなことになるのだ。子供たちは、さぞ、雨が降つて、寒くはあるし、腹はへつて、どんなに困つてゐるだらう。司會者なんて分らないやつらだ……。」

お父さんは、自動車から、雨の中にかがやく、街燈のぼんやりとした火影を

見つめながら、早く早くと、氣をもんでゐられました。

三人は、やつと芝居が終つて、會場から出ようとする、雨がしきりに降つてゐます。

「困つたなあ。」と、正二が言ひました。

「停留場まで、幾メートルあるだらうか。かまはず、駆足で行かうか？」

「かまはん、行かうよ。」

三人が、肩を並べて歩き出すと、どこか、うしろの方から、

「立雄、立雄……。」と、呼ぶ聲がしました。三人は、ふりむくと、一臺の自動車が止まつて、ドアをあけて、立雄のお父さんが、手招きをしてゐられたのです。

「お父さん！だ。」と、立雄と正二は、迎へに來て下さつたのだと思つて、

走つて行つて、その車に乗りました。しかし、つづいて驅けて来るはずであつた、秀吉は見えませんでした。

「秀吉君は？」と、正二は、あわてて、動き出した自動車から、飛び下りました。

「かまはん、下りなくてもいいぢやないか。」と、立雄のお父さんの言はれた言葉をささ流して、彼は、秀吉を追つて、雨の中を駆け出して行つたのです。その間に、いつしか、自動車は去つてしまひました。

その日から正直になつた話

あるところに、氣の弱い少年がありました。いい少年ではありましたが、
ど、氣が弱いばかりに、嘘をついたのです。自分でも、嘘をつくことはよくな
い、卑怯なことだといふことは知つてゐました。

「もう、これから、私は嘘はつかない。」と、嘘をついた後では、いつも少年
の心にさう思ふのでした。

けれど、また、悪いと思はれないやうな場合もありました。たとへば、病人
に向かつて、

「この間よりも、ずつと顔の色がよくおなりです……。」と言ふと、實際
はさうでなくても、病人を喜ばすものである。こんな時の嘘は、かならずしも
悪いのでない。もし、それがいいとすれば、やはり、嘘をついてもいいのだら
うか？

「僕は、昨夜、幽霊を見たよ」と言つて、何か廣場の中にあつたものを見て、空想にふけたことを、誠しやかに友だちに話すと、つまらなさうな顔つきをしてゐた友だちらが、急に眼を輝かしながら、近くへ集まつて来て、

「君、ほんとうかい……。」と、言ふのであります。

「ああ、ほんとうだ。」と、少年は熱心に、空想したことを、見たことのやうに話をするのでした。この少年の嘘といふのは、大抵かうした罪のない、ちよつと、みんなを面白がらせようとする種類のものではした。

「自分の嘘は、決して悪い嘘ではないのだが、それでも言つてはいけないのだらうか？」と、少年は、自分の心に向かつて、たづねました。

「それは、いけないにきまつてゐる。嘘をつくのは、人間として卑怯のことだ。」と、自分の心とは思はれないやうな、なんだか年とつた、太い聲が答へ

ます。

この時、一方で、それを打消すやうに、自分より、ずっと勇敢な、活々とした、やはり、それも自分の心とは思はれないやうな聲が、

「そんな嘘は、言つたつて差支へない。小説でも、童話でも、みんな嘘のことを眞實らしく書いてゐるのぢやないか……。」と、言ひました。

「小説は、嘘を書くものだといふことは分つてゐるが、お前の言ふことが嘘だと分れば、誰もお前を信じなくなるだらう。」と、年とつた太い聲が言ひました。

かうして、少年は、常に自分の良心を咎めながら、気が弱いので、つい、みんなを笑はせたり、喜ばせたりしたいために、嘘をつく癖を改めることができなかったのです。

その嘘は、無邪氣むじやきなものであつても、それをほんとうにした人は、あとで嘘といふことが分ると、馬鹿にされたと思つた。そして、だんだんみんなは、この少年を信用しなくなつたのでした。

「お前は、いい子だけれど、ていさいのいい嘘をつくから、悪い子になつてしまつた。」と、少年のお母さんは、言つて、泣かれたことがあります。

そのたびに、少年は、自分の悪い癖を改めようと努力どりよくしました。氣の弱い少年には、なかなかそれができなかつた。また知らずに嘘を言つてしまふのでした。さうした後では、いつも深い後悔こうかいをするのでした。

なんでも長い間に、できてしまつたことは、容易のことで改まるものでない如く、かうした癖もまたその一つです。

ある夏の日の事でありました。少年は、いつものやうに、學校から歸つて外

へ遊びに出ました。

友だちは、どこへ行つたものか、往來わうらいへ出て見たけれど、誰の姿も見えませんでした。これは、きつと川の方へ遊びに行つたのだらう？……。自分も、その方へ行つてみようと思ひながら、少年は、往來を歩いて、だんだん村はづれのさびしい方へと、やつて來ました。

道が三方に分れるところがあります。ちやうどそこにあつた石の上に腰をかけて、一人の男が、ぼんやりとした顔つきをして休んでゐました。その男は旅の人のやうです。

少年が、歩いて行くと、旅人は、にっこりと笑ひました。少年は、やさしいどこかのをぢさんだと思ふと、急になつかしくなりました。

「をぢさんのお家は、遠いとこなの？」と、少年はききました。こんなに、

やさしいをぢさんが、もし近くであつたら、自分は寂しい時には遊びに行かうものをと、思つたからです。

「遠いところとも、汽車に乗つたり、船に乗つたりしなければ行かないところなのだ……」と、旅人は、少年の顔を見て、笑ひながら答へました。

さう言つて、旅人は、思ひ出したやうに、兩方の袂をさぐり、また、ふところなどを探して、困つたなといふやうな顔つきをしたのです。

「をぢさん、どうしたの？」と、少年は、旅人の前に立ちながら、たづねました。

「煙草を吸はうと思つたが、マッチをどこかへなくしてしまつた……」と、旅人は答へました。

「マッチがないの？」

「このへんに、煙草やマッチを賣る家はないか知らん……」と、旅人は、言ひました。

「賣つてゐるところはないけれど、僕、マッチを持つて來て上げよう。」と、少年は言ひました。

旅人は、少年の言葉をきいて、喜ばしやうな顔つきをしました。が、考へながら、

「をぢさんは、日の暮れないうちに、まだ遠くまで、歩かなければならぬのだ。坊のお家は、よほどあるだらうから、煙草をすふのを我慢して行かう……。」と、言つたのです。

少年は、眼をかがやかしながら、

「すぐに持つて來てあげよう！」と、言つて、あちらへ向かつて駆け出しま

した。

旅人は、少年の親切を無^ひにしてはいけな^いと思つて、黙^{だま}つて、ほほえみま^した。そして、そのうしろ姿を見お^くつてゐたのです。

少年は、近くに友だちの家があるから、そこへ行つて、マッチを借りて來^ようと思ひました。一生けんめいに駆けて、森をまがると、友だちの家が畑の中に見えました。彼は元氣づいて、その家の入口まで、息^{いき}をさらしながらたどりつきました。彼は友だちの名を呼んだ。けれど、返事がなかつた。

「ゐないのだらうか？」と、少年はがっかりしました。

しかし、自分は、友だちのお母さんを知つてゐるから、家へはいつて、頼^{たの}まうと思ひました。彼は、家へはいりました。けれど、家は、みんな留守であつて、誰もゐなかつたのです。

「畑へ行つて留守なのだらうか？」

少年は、かうつぶやくと、仕方なしにその家から出て、こんどは、知つてゐるお婆さんの家へ駆けて行つたのです。自分の家へ歸るよりも、まだその方が早かつたから。

「お婆さん、マッチを貸しておくれ。」と、少年は、その家へはいるなり言ひました。

「マッチかい。さつき私は、眼がわるいので、土瓶^{どびん}の水がこぼれたのを知らずにゐたら、マッチが、みんな濡^ぬれてしまつて、火がつかない……。それは、困つたことをしたな。」と、お婆さんは、眼をくしくしやさせながら、答へました。

少年は、がっかりしてしまひました。どうして、こんなまはり合せになつた

のかと思ひました。これでは、自分は、あの旅人に對して、嘘をつくことになつてしまふ。旅人は、急いでゐるのだ……。と思ふと、少年は、とうとう自分の家まで駆けて行つて、マッチを握つて、すぐに旅人のゐるところへ走つて行きました。

旅人は、かなり長い間、少年の戻つて来るのを待つてゐました。けれど、どうしたとか、なかなか戻つて来ませんでした。

「なんといつても、子供の足だからな。」と、旅人は言ひました。そして、西の空を眺めました。夏の日は、いつしか傾きかけてゐたのであります。

「おそくなるから出かけますよ。坊ちゃんの御親切をありがたく思ひます。旅人より。」と、書いて、石の上のこして、男は去りました。

少年は、ついおそくなつて、旅人に嘘を言つたと思はれはしないかと、心配

しながら走つて来てみますと、もうそこには、旅のをぢさんは、ゐませんでした。少年は、石の上のこしてあつた紙片の文字を見ると、旅人は少年の言つたことを、決して嘘とは思はなかつたばかりか、深く、心に感謝してゐたことが分つたのです。

このことは、少年の心を深く感動させました。もう自分は、決して、いつても嘘を言つては悪いと思ひました。

そして、正直といふものは、かならず、相手を感じさせずにおかないものと、知つたのです。

この後、少年は、正直ないい子供となりました。

町はづれの空地

空地には、草が繁つてゐましたが、いまはもう黄色くなつて、ちやうど柔らかな敷物のやうに、地面に倒れてゐました。霜の降つた朝は、かへつて日が上がると暖かになるので、この附近に住む子供たちは、ここへ集まつて来て、凧をあげるものもあれば、ボールを投げて遊ぶものもありました。

この空地の中央に、一本の高い松の木がありました。獨りぼつちで、いかにも、その姿がさびしさうに見えることもあれば、また、さびしいといふことなど知らぬ聖人のやうに、いつもにこにことして、子供たちの遊んでゐるのを見守るやうに見えたこともあります。

この町の子供たちは、みんなこの木を知つてゐました。たとへ木の傍へよつて、ものを言ひかけなくとも、お母さんが留守でさびしい時や、お父さんに叱られて、悲しかつた時は、遠くから、ぼんやりとこの木をながめて、訴へたも

のです。すると、木は、

「私のところへおいで。」

と、手招きするやうに、なぐさめてくれたものでした。

だから、もし、この廣場に、工場でも出来るとか、また、道が通るとかいふやうなことがあつて、この木を切る話でも、もちあがつたら、おそらく、この邊の子供たちは、どんなに悲しむことか知れませんが。悲しむばかりでなく、

「あの木を切るのは、かはいさうだ。」

と、いつて、大人たちに向かつて、同意を求め、この木を切ることに反対したのでありませう。

その多くの子供たちの中にも、立雄君や、博君は、一ばんこの高い松の木を愛してゐる少年でした。他の子供たちが、いろいろのことをして遊んでゐるの

に、二人は、みんなから離れて、松の木の下に来て、枯草の上に坐つて話をしてゐました。

「きれいな、空だなあ。」

と、不意に、大空を見上げて、博君が言ひました。

「まだ、春にはなかなかなんだね。早く春が来るといいなあ。」

と、立雄君は、赤味を帯びた、松の木の幹をながめて、去年の春、遠足に行つて、田舎道を歩いた時の景色を思ひ出したのです。

「ごらんよ。あの白い雲は、ちやうど松の木の上にあるから。」

と、博君が言ひました。

「松の木と、雲と、話してゐるのだね。」

と、立雄君が、答へました。

二人の少年は、松の木の頂きと、さらに、はるかに高く、遠い、青い空に浮かぶ、白雲を見上げて、笑つてゐました。

「どんな話をしてゐるのだらう？」

「きつと、雲さん、君は、どこへでも飛んで行けて面白いだらうな、と、松の木が言つてゐるのだよ。」

と、立雄君が、言ひました。

「僕はね、松の木君、君はいつも地の上で、平和に暮らされて羨ましい。美しい鳥が止まつたり、子供たちの遊ぶのを見たりして、愉快だらう。私は、風に吹かれて、かうして海の上や、野原の上を、毎日あてなく飛んでゐると、雲がいつてゐるのだと思ふな。」

と、博君が、言ひました。

そのうち、おひるの汽笛が鳴つたので、二人は、草の上から起き上がつて、彼方へ歩いて行きました。

近頃になつて、この原つばへ來はじめた、コリントゲームのお爺さんが、今日も店を出して、まはりには、もうたくさん子供たちが集まつてゐました。そして、赤い風船玉が、ふわふわと幾つも臺に結びつけられて、キャラメルや、飴の棒などが、傍に置いてありました。

二人は、立つて見てゐました。

すると、この時、あちらで、カチカチといふ、拍子木の音がしました。

「あつ、紙芝居が來た……。」

「黒い眼鏡の小父さんだよ。」

子供たちは、口々にさういつて、たちまちお爺さんの、コリントの前からは

なれて、彼方へ走つて行きました。立雄君も、博君も、やはり同じであつたのです。

活動の辯士上がりであつた、紙芝居の小父さんは、説明がなかなか上手なので、子供たちには、大そう好かれてゐました。

小父さんは、いつものやうに、子供たちを相手にして、お話を始めてゐました。そこへ、だしぬけに、コリントのお爺さんが、やつて來ました。

「あゝ、ここで店を開くのは止してもらはう。」

と、お爺さんが、言ひました。

黒い眼鏡をかけた、紙芝居の小父さんは、

「冗談ぢやない。お爺さんこそ、ついこの頃、ここへやつて來たのぢやないか？ 私は、もうずつと、ここへ來てゐるのだ。ここにゐる坊ちやんや、お嬢

さんたちに聞いてみても分るよ。ねえ、さうだらう……。それごらんよ、お爺さん、そんな無理をいつてはいけないぜ！」

と、小父さんは、言ひました。立雄君も、博君も、どうなるだらうと見てゐました。お爺さんは、一步前へよつて、

「若いのが、この土地は、私が生まれたところだ。それがのう、この年になるまで旅で暮らしたが、いいこともないので、歸つて來た。誰も私の顔を覚えてゐるものも、知つてゐる人もゐないのだ。だが、この土地がなつかしくて、ここへ來る譯なんだ。お前さんは、話もうまいし、顔も廣いし、ここでなければならぬこともなからうが……。」

と、お爺さんが、言ひました。

「ああ、さうか。お前さんは、ここで生まれたのか？ それは、なつかしい

だらう。分つたよ。お爺さん、明日から、私は、他ほかで稼かせぐことにしようよ。」
紙芝居の小父さんは、みんなに向かつて、帽子をぬいで挨拶あいさつをすると、彼方の町の方へ行つてしまひました。

二人の少年は、何となくさびしい氣持がしました。そして、さつき、松の木の下に集まつて、空を見て、空想にふけつたことが、思ひ出されたのであります。

「人間にも、あの松の木のやうな人もあれば、また、雲のやうな人もあるんだね。」

と、博君が、考へながら言ひました。立雄君は、だまつてゐましたが、しばらくして、

「ねえ、博さん。お爺さんの子供の時分から、あの松の木は、あつたんだね。」

と、立雄君は、別のことを考へてゐたと見えて、うしろを振返ふりかへつて、空地の真中に立つてゐる松の木をながめて、言つたのであります。

よく晴れた空の、あちらこちらに、凧は上がつてゐました。しかし、白い雲は、何處どこへ行つてしまつたか、もう、見えなかつたのであります。

ある夏の日のこと

姉さんは、庭前の躑躅の枝に、蜂の巢を見つけました。

「まあ、こんなところへ巢を造つて、あぶないから落してしまはうか。」
と、箒はうきを持つた手をあさへて、ためらひましたが、

「さはらなければ、なんにもしないでせう。」

せつかく造りかけた巢をこはすのも、可哀かはいさうだと考へ直して、しばらく立止まつて、一疋の親蜂が、脇見わきみもせず、熱心に小さな口で、だんだんと大きくしようと、固めて行くのをながめてゐました。そのうちに、蜂はどこへか飛び去りました。何か材料を探さがしに行つたのでせう。しばらくすると、また戻つて來ました。そして、同じやうなことを、倦うまずに繰返くりかへしてゐました。

「この蜂一疋だけだらうか。」

彼女は、同じ一疋の蜂が、往つたり歸つたりして、働いてゐるのしか見なか

つたからです。

「勇ちゃんに、だまつてゐよう。」

見つけたら、きつと巢を取るであらうと思ひました。

姉さんは、坐つて、仕事をしながら、時々思ひ出したやうに、日の當たる庭前を見ました。葉の黒ずんだ石榴の木に、眞赤な花が、點々と火のともるやうに咲いてゐました。そして、水盤の水に浮いた睡蓮の葉に、蜂が下りて止まつてゐるのを見ました。

224

「あの蜂は、さつきの蜂かしらん。」

眼をはなさずに見てゐると、蜂は、立つて、躑躅の枝の方へ、飛んで行きました。

「やはりさうだわ。水を飲みに来たんでせう。」

翌朝、庭を掃除する時に、姉さんは、蜂がどうしてゐるだらうと、わざわざ躑躅の木のところへ行つて、巢をのぞいて見ました。そこには、昨日の親蜂がやはり一疋で、一生懸命に巢を大きくしようとしてゐました。彼女は、始めてその時、一匹の蜂の力で造られた蜂に注意を向けたのです。

なんと並々ならぬ心遣ひと、努力が、その巢に傾けられてゐることか。たとへば、雨風に吹かれても、容易に折れさうもない、丈夫な枝が選ばれてゐました。また、巢の附根は、さはつても落ちないやうに、強さうに黒光りがしてゐました。小さな蜂に、どうしてこんな智慧があるかと、不思議に思はれたほどでした。

225

「さうだ、これを弟に見せてやらう。そして、利口な蜂が、どうして巢を造り、また子供を育てるのに苦心するかを教へてやらう。さうすれば弟は、ここ

に巢のあることを知つても、決して落すことはあるまい。」

と、考へたのでした。午後になつて、勇ちやんは、學校から歸ると、庭に出て、一人で遊んでゐました。

「勇ちやん、蜂の巢があつてよ。」

彼女は、弟の顔を見ました。

「ああ、知つてゐる。」

「え、知つてゐるの。」

弟が、どうして、それを落さなかつたらうと疑はれました。

「姉さん、躑躅の木だらう。お母さん蜂が、ひとりで巢を造つてゐたのだよ。」

「ええ、さうなの。」

「この間から見ると、大分大きくなつた。あの穴の中に子供がゐるんだね。」

暑い時は、水盤の水を含んで行つて、巢の上を冷やしてゐるよ。」

「まあ。」

そんな悉しいことまで、いつ、弟は観察してゐたのだらうと、びつくりしました。

しかし、姉さんは、弟が、どんなにその蜂をかはいがつてゐるかを、まだ知らなかつたのです。

「君、蜂の子を持つて行くと、ほんとうによく釣れるよ。」

子供達は、日課のやうに、みんなで川へ釣に出かけました。彼等は、血眼になつて、蜂の巢をさがしてゐたのです。

勇ちやんは、その話を聞くたびに、庭の蜂の巢を目に浮かべました。この頃母蜂の片方の羽根が、少し破れてゐるのを考へると、胸が痛くなるのを感じま

解
説

した。他の子供は、どこからか、蜂の子をさがして持つて行くことがあつたが、
勇ちゃんだけは、いつも、うどん粉の餌えさを造つて、釣に出かけたのでした。

未明童話は、現代日本童話文學の最高水準を示すものであるばかりでなく、やがて日本の文學が國際的に進出する日が來れば、世界的にも優位を占めるに相違ない。ここに、未明童話選集『海から來た使』を編むに當り、その人及び作品について、研究の一端に觸れてみることにする。

昭和十三年（一九三八年）富山房百科文庫の一卷として刊行された未明童話集『赤い蠟燭と人魚』の序文において、氏は、次の如く述べて居られる。

「顧みれば、明治四十年に、第一小説集『愁人』を出版し、四十三年に、第一童話集『赤い船』を上梓しました。それから、私の長い間の文學生活はつづいたのであります。新浪漫派から、人道主義へ、さらに解放運動へと。それ等の傾向は、その時代の童話にも、恐らく覗はれることと思つてゐます。はじめは、童話を文學の一形式として考へ、これによつて自己の表現に重きを置いた

のであるが、最近は、児童のために、共に笑ひ、共に泣き、共に訴へながら、専心筆を執つてゐます。正しい、善い人間を造ることによつて、はじめて、この世の中の明朗が期せられると信ずるがためです。」

と、極めて簡明にその態度と抱負を表明して居られる。作者自身のこの告白をしるべとして、その歩まれた跡をたどつてみたいと思ふ。

×

小川未明氏は、明治十五年（一八八二年）四月、新潟縣中頸城郡高田城下に出生された。父君澄晴氏は、戦國時代の英雄上杉謙信の人となりを見慕し、それが祭祀を志し、獨力を以て春日山神社を建立された。氏はその一人子で、高田中學を中退し、二十歳のとき上京して早稻田大學豫科に入り、英文科に進み、明治三十八年（一九〇五年）第一回生として卒業された。在學中から、坪内逍遙

博士の特別の指導を受けて創作の筆を執り、處女作「霞に雲」を『新小説』に發表されたのは、二十三歳の時であつた。次いで「人生」を『早稻田文學』に發表せらるるに至つて、文壇の注目をひき、明治四十年（一九〇七年）には、最初の小説集『愁人』及び『綠髮』の二巻が刊行された。時流を超越した特異なるその作風に對して、文藝批評家は、ネオ・ロマンス（新浪漫主義）と稱した。大學卒業後、暫らく早稻田文學社に入り、雑誌『少年文庫』の編輯を主宰されたことがあり、爾來、小説と並行して、童話の筆を執り、明治四十三年（一九一〇年）に、最初の童話集『赤い船』が出版された。

氏が文壇に出られた頃は、日本の文壇は自然主義の全盛時代で、多くの作家がそれに追隨する中にあつて、ひとりロマンスの孤壘を守つて屈しなかつた。さうして明治四十三年、短篇小説集『物言はぬ顔』が、耽美派の作家と

稱された永井荷風の小説集『歡樂』と共に、早稲田文學社の推讃を受けるに至つた。けれども一般文壇の風潮は、自然主義にあらずんば文藝にあらずといふ有様であつたから、反自然主義の作家にあつては、文藝上のみならず、生活の苦難とも闘はねばならなかつた。當時氏が二人の愛兒を相次いでうしなはれたのも、そのための犠牲であつたといはれてゐる。小説「魯鈍な猫」は、その頃の生活を書かれたものである。

かうして壯年期を迎へられた氏の思想は、人道主義的、社會主義的傾向を迎へるに至り、大正九年（一九二〇年）日本社會主義同盟の結成に際しては、文壇人として率先これに加盟し、發起人の一人となられた。「底の社會へ」「小作人の死」「彼等の行く方へ」「血に染む夕陽」「赤き地平線」等は、その時代における小説の代表作である。しかし、その後の思想は、独自の藝術的人生觀に移行

し、科學的社會主義思想とは別個の立場を明らかにするに至り、遂に小説の筆を絶つて、童話に専心する旨を宣言して、今日に至つた。

その著作集は、數十巻に及んでゐるが、大正十四年（一九二五年）發行の『小川未明選集』全六巻に、當時までの殆ど全著作が収録され、童話は『未明童話集』全五巻が、昭和二年より六年まで（一九二七—一九三〇年）の間に刊行され、その後の新作集も十數冊に及んでゐる。昭和十八年中、童話全集の刊行が企てられたが、戦争のため不能となり、二巻だけで中絶してしまつた。なほ『現代日本文學全集』『明治大正文學全集』『新興文學全集』等にも、未明篇として輯録されてゐる。

次に、氏の作風を知るためには、それに對して冠せられた新浪漫主義なるものを究明する必要がある。

浪漫主義（ロマンチズム）なるものは、十八世紀末から、十九世紀の初めにかけて、歐洲全般にわたつた文藝運動に對して、文藝史家の與へた名稱である。理想を求むるドイツの思想家達が、感情の優位を信じ、美的理性を尊重する傾向をもちはじめたのが、この運動の初源であつて、それが文藝に反映しかけたのは、彼のゲエテあたりからだといはれてゐる。文藝上に於ては、自由な物語形式、主觀的な現實把握、理想主義的傾向、詩と空想の世界等において、浪漫的（ロマンチック）といふ概念をつくり出し、全歐洲の文藝主潮となつた。浪漫主義文藝の特色は、一、主觀的世界の把握。二、空想的であり感情的であること。三、個性的であり自由を尊重すること。四、象徴的であり神祕的であること。五、好奇的であり憧憬的であること。等であつて、形式主義、寫實主義的傾向のものに對立するものである。

その後、ダーウキンの『進化論』等の刺戟を受け、思想的にも科學尊重の風潮を呈し、文藝上にも、自然主義なる新運動が勃興した。即ち、あるがままなる人間生活の現實に對して、科學の研究法をとり、綿密なる觀察と實驗によつて、その實體を報告するが如き手法をとる文藝である。したがつて、現實から遊離してゐる精神的なもの、主觀的存在は、すべて排除される。理想や空想等は勿論問題でなく、その人生觀は無理想無解決である。この主唱者はフランスのゾラであるといはれ、その大作ルーゴン・マツカール叢書は、典型的のものとされてゐる。日露戦争後、我が國にもこの自然主義文學がはいつて來て、文學界、思想界を風靡した。

この自然主義乃至現實主義に反抗して立つた新文學の諸相を總稱して、當時の歐洲の文藝史家は、ネオ・ロマンチズム（新浪漫主義）といふ名稱を與へ

た。即ち科學主義に對して、精神生活を高潮し、前期浪漫主義の概念を新しく發揚するところの文學である。——未明氏の文學は、この新浪漫主義に立脚するものだといはれたのである。

しかし、この文藝上の何主義とか何派とかいふものは、政治上の政策や黨派のやうに、單一に區別のできるものではない。世界の近代文學は、歐洲を中心として展開されてゐるけれども、假りに浪漫的の概念を見出ださうとすれば、我が國に於ける古今の文學——萬葉時代にも、平安朝の物語の中にも、中世紀の軍記物の中にも、過分に織込まれてゐるのである。文藝の創作は、その作家の個性の顯現である。その作品のもつ風格は、直ちにその作家の人格である。先に氏の閱歴を叙して、その生國や家系まで記したのはそのためであつた。朝夕日本海の波濤に對し、英雄を祀れる社畔の家に成育された二十年間の生活は

いかにも天才藝術家の發祥にふさはしい温床であつたやうに思はれる。

x

かうして小川未明氏は、新浪漫派の先鋒として、若い姿を日本の文壇に現はされた。『愁人』『綠髮』『物云はぬ顔』『少年の笛』等に收められた初期の作品に接するものは、豊かなる空想の奔流の中に、神祕と象徴の高い香りに酔はされずにはゐられなかつた。しかもその陶醉の中に、高き理想と、限りなき美への憧憬とを感ぜずにはゐられなかつた。まことに、純情の昂揚、眞理と正義と美の傳道は、ロマンチストの使命である。しかし、その使命を、人生は果たしてそのまゝ受入れてくれるであらうか？ 至るところが矛盾だらけの人生の現實に直面した時、ロマンチストは、もはや單なる青空の歌手ではゐられなくなる。理想の闘士として、そこに藝術と人生との戦ひが展開される。氏の思想が

人道主義に傾き、さらに社會主義に移行したのは、必然の過程であつた。

しかし、さうした思想の變轉それ自體が浪漫的の現はれであつて、左翼作家とかプロレタリア文學とかいふやうな、みづから極限した位置に止まれるものではなかつた。藝術と人生との闘ひは果てしなき長期戦である。氏が斷然成人文藝を棄てて兒童文學の分野に直進されたのは、氏の天分において至當の行き方であり、まことに意義深きものであつた。兒童の世界こそは永遠に純情の棲家である。人生に對する長期戦の陣營としても、兒童を通して永遠への繋がりがある。「兒童のために、共に笑ひ、共に泣き、共に訴へながら、専心筆を執つてゐます。正しい、善い人間を造ることによつて、はじめて、この世の中の明朝が期せられると信ずるがためです。」といふ、本章の初めに引用した氏の言葉の意味が、よく首肯できるのである。

もはや、人生の矛盾や社會の不合理に對する眞向からの戦闘ではなくして、人生の面を劃するところの現實の壁を突き抜いて、眞理と理想への通路を開くといつたやうな光景が、今の氏の藝術境であるやうに思はれる。

x

本書には十二の話篇を選んだ。氏の作風について今まで叙べ來つたことを參考として、讀者に、自由に鑑賞していただくため、一々の解説は省略することとするが、これを選出するには、おほよそ三つの段階を基準とした。

配列の順からいへば、「海から來た使」「絲のない胡弓」「蝶と三つの石」「青いランプ」「二度と通らない旅人」等は、初期におけるロマンスシズムの白熱時代から、人道主義的傾向を帯びた時代の作品である。これらの作品は、「赤い蠟燭と人魚」「月夜と眼鏡」「黒い人と赤い櫓」「月と海豹」(他の選集と重複する

ため本書には載せなかつた)等の名篇と共に、童話文學における古典の地位を占めるものであり、世界的名篇と稱しても過言ではない。

次いで「時計のない村」「平原の木と鳥」「頭を下げなかつた少年」「青空の下原つば」等は、作者の主観が社會に向けられたことを示してゐる作品である。特に「青空の下原つば」は、表現の手法に一轉化を來たした頃の代表的のものである。即ち、在來の童話の類型である象徴的手法から轉じて、全く現實的になつて來てゐる。極めて平面的に、子供の日常生活を描いたものであるが、かくの如く精細明瞭に子供の世界が描き出されてゐる作品は少ないであらう。一行半句も、作者の主観でものをいふ言葉が挿んでないが、しかも、人間世界の實相が齒車のやうに切々と響いて來て、幾多の重要な問題に胸を打たれる。成人の讀者にとつても感激の深い作品である。

「その日から正直になつた話」「町はづれの空地」「ある夏の日のこと」等は、比較的最近の作風を示すもので、平坦な現實的の中に、しかも烈々たる緊張味を感じさせ、作者の圓熟境がうかがはれる。

x

以上の如く、我々はこの一卷によつても、未明童話の眞髓に觸れ得るのであるが、特に一言したいことは、一般の成人が、童話文學に對して、もつと理解を深めてもらひたいことである。それには二つの理由がある。

その第一は、子供を育成する必要上からである。人の父たり母たる者は、その子の教育について、衣食住について、格別な關心をもたないものはないであらう。同様に、子供の魂をばぐくむところの童話文學に對する正しい理解をもつことは、むしろ常識の問題といつてよいであらう。

その第二は、成人みづからのために、童話を鑑賞することである。もとより童話は、子供を對象とする文學である。しかし、子供を對象とするが故に藝術價值が低いといふことはできない。いかなる成人も曾ては子供であつた。子供と成人とを區別する最大のものは、肉體の發達と、それに伴ふ經驗と知識とである。しかも、その經驗や知識は、却つて魂の純眞を失ふことに役立つ場合がある。その純眞を取戻して、永遠に衰へざる魂の歡喜に生きるためにも、低俗な讀物などに費やす時間を、優れた童話の鑑賞に用ひたいと思ふのである。他の本にも同様のことを述べてあいたが、ここに再記する次第である。この「解説」を、成人を對象として書いたのもそのためである。

昭和二十一年六月

山内秋生

使來から海



昭和二十一年十月五日印刷
昭和二十一年十月十日發行

定價十六圓五拾錢

著者 小川未明
發行者 瀧真次郎
印刷者 青木勝兵衛
發行所 東京日本橋區大傳馬町二ノ四
株式會社 南北書園
配給元 東京都神田區渡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

995
97



南北書園

